

ふるさと（一）

加藤 策二

（会員）

私は、今から六十八年前、昭和二十年三月佐伯中学第三十二期生として卒業したものです。齢を重ね、ふるさとを思い起こす事も多くなり、つれづれに書き記した「ふるさと」の冊子を何かの形で残したいと考えていました。この冊子には、佐伯の昔の世相や町の姿などが生き生きと描かれています。その一部を紹介します。

（一）傘が飛んだ――幼稚園の頃

「傘が飛んだ」と私が叫んだ。「坊の傘が飛んだ」と他の子ども達が言った。梅雨の合間の昼下がりに、幼稚園帰りの一時である。私たち七人は仲良く連れ添って父母の送迎もなく、二キロの道を歩いて幼稚園に通っていた。

鷹石まこちゃん、大溝きよさん、梅田のみいちゃん、西

山美代ちゃん他に女の子二名。初めにまこちゃん、当時の園服エプロンの小さなポケットに、子供用の問屋傘を差して手を離し歩き出した。みんなはそれを真似て歩いた。

臼坪川のイブ（塩水の上流を防ぐ水門）の上を過ぎる頃、突風が吹き他の子供はすぐに手にもったが、何事にも鈍い私は、取るのが遅く傘は宙に舞い上がり川の中程まで飛んで行った。みんなが「坊の傘が飛んだ」と騒いでいる。私は泣きじゃくった。

近所の者が知らせたのだろう。家より父の弟子が飛んできて、近くに泊めていた船に跳び乗り、傘を拾い上げてくれたが、骨と紙がばらばらに離れて使い物にならなかった。

通りすがりの川の辺の道は、国木田独歩の短文「豊後の国佐伯」の『<sup>はせ</sup>櫓の道』。大半は桜並木に変わっていたが何本が残った櫓の木が秋になると紅葉し、子供の肌を痛めていた。この櫓は江戸中期佐伯藩の財政に寄与したであろう。藤沢周平の「漆の実のみのる国」や重門冬二の「上杉鷹山」を読み思い起こされる。

春の小川は田圃を潤した水が流れ込み、メダカやオタ

マジヤクシが泳ぎ、岸辺には蓮華、たんぼぼ、すみれ草が咲き乱れ、初夏にはホタルが飛び交い皆の目を楽しませてくれた。秋には彼岸花じよげんばがくるっと巻いた赤い花びらで迎え、冬は稲藁いねわらの小積みがあり道草には格好の場だった。対岸には翌年六月一日開校の生徒数六百、十三学級、大分県一の設備を誇る佐伯東尋常小学校建設の槌音が高く響いていた。(昭和十年開校)

今で言うお絵描き、お遊戯、張り絵、童謡、数遊び、どれをとっても不器用な私は幼稚園は好きではなかった。ただ行き帰り、季節のうつろいに従い、それぞれ違った遊びに時の経つのを忘れた楽しみを持った。中学に入り、佐伯小学校から来た旧友石丸節夫君に「お前と幼稚園が一緒だった。先生は誰それだった」と言われても記憶は全然無い。

母親は前の店で、煙草、酒、塩、砂糖、文具、釣り具、化粧品等ようずやを売る万屋よろずやをしていた。二階に父と弟と一緒に寝泊まりし簡単な炊事場があった。道路を挟んで父の職場延六十坪の總二階があり、二階には桶造りの職人が寝泊まりしていた。線路の傍の母屋は釜や大きな物置、食堂代わりの囲炉裏のある八畳、八畳二間、六畳。祖母と二人

の姉と私が住んでいた。味噌造りに失敗した室納屋むろなやが続き前に白壁の土蔵があった。

私は左利きであった。左で食事していると店から来た母親がすぐ見咎め、「左で」と叱られていた。私が「手がない手がない」と言うと、祖母が煮魚など小骨まで綺麗にむしってご飯や里芋などと一緒に口まで運んでくれた。幼稚園の頃はよく病氣もするし、吹き出物もでき、母が何日も六〇ハップひとうを入れ体を拭いてくれていた。小学校では父が保護者会副会長で、田原先生に頼んで目の前に移され、食事も字を書くのも次第に右手になった。

## (二) 佐伯東小学校燃ゆ

昭和二十一年初春、幣原内閣閣僚七名、翼賛選挙よくさんによる衆議院議員三百三十人他が公職追放。同年十一月には地方にも及び府県知事、市町村長、戦争を鼓舞した多くの教職員が追放された。二十二年後半東京裁判は大詰めを迎えつつあった。

この年パーマネントが再び流行を初め、女性にはボチボチ「もんぺ」を脱ぐようになってくる。ミス日本を初め各地でミスコンテストが始まる。

佐伯では自家用製塩が盛んで、特に番匠川の分流長島川岸は、軒並み塩炊き小屋が連なる。これと同じくして担ぎ屋が横行、米と塩との交換によって生計を立てるものを多く見かけた。仕事など何もしなくてもよい奥方様二人が白坪川が合流する長島川の少し上流で製塩していたのを思い出す。一人はMさん、もう一人は妹のTさんである。

塩炊きは夏も冬も大変であつた。薪の仕入れ、運搬、薪割りから始まり、にがり取りなど丸一昼夜半かかつて炊きつめる。棒目<sup>ぼうめ</sup>とにらめっこして炊きあげる。三年間頑張つた。二方とも加藤佐吉の姉である。

昭和二十二年元旦、子の刻、昭和十年竣工当時県下一の設備を誇つた『佐伯東初等科国民学校(旧佐伯東尋常小学校)』が全焼した。

除夜の鐘が鳴り、昭和二十二年の新しい年を迎えた。次姉サト夫婦と長く雑談を交わしていたが、次姉夫婦は二階八畳二間に、弟は二階六畳、上の姉せつは私と共に下の八畳間の床につく。一寸まどろんだ時、けたたましくサイレンが鳴り響いた。

「火事はどこだ」と言いながら、みんな一斉に飛び起き表

に出て南の空を見ると、すぐ近くに大きく火の手が上がっているのが見える。直ぐにふた従兄弟の船大工をしている明兄が大きい声を上げ飛び込んできた。

「東校が燃えている。叔父さんが宿直じゃあ。」

いつもなら野次馬半分で火事見に行くが今日はちがう。心配しながら弟と共に四人で走っていく。学校まで四百<sup>メートル</sup>、元海軍下士官集会所を過ぎると燃え盛る学校は目の前、火の粉が飛んでくる。市営消防には、海軍よりの払い下げを含め消防車が七台、各分団のガソリンポンプ車が十数台放水している。左に白坪川、右に大きい溝、各所に水道消火栓があり、学校には二十五<sup>メートル</sup>のプールもあり水利は充分だったが、乾燥しきつた煙突のような校舎、瞬く間に燃え広がり、間もなく棟が焼が落ちた。我々では何ともしがたく帰って寝ることにしたが、なかなか寝付かれなかった。その日より数日、父と従兄弟になる平井氏は聴聞を受けた。火事の原因は前日、裁縫作法の女教師が元旦に着る着物に電気アイロンをかけ、消し忘れたものだった。

同年六・三制の施行により新生中学の仮校舎を、佐伯海軍航空隊庁舎跡に設け、佐伯市立鶴谷中学校と呼称。爆

撃の跡ひどく雨漏りのある中で勉強をしていた。

庁舎の一部を大分労働基準局佐伯労働基準監督署で使っていた。監督署ではGHQの命により、労働者全員を再教育するため労働学校を設けた。各事業所は一週間毎に交代しながら、各職場より全従業員を派遣、労働法の講習を受けさせる。私は主な工員に替わって何度か受講した。これが後に衛生管理者の試験に寄与できた。

東小学校焼失後の対策、市教育委員会と学校PTA会長正田武雄、副会長加藤佐吉他は、学校区区民のアンケートを取り学校再建に取りかかる。

その頃の私は悩み多き年頃、初恋、製材、木材業の周辺での労働。社長宅の農作業手伝い、税務署への就職の話等々、苦しい中にも変化に富んだ年であった。

学校の復興にはみんなが苦労した。まずお金。資金の二分の一は学校区住民の寄附でまかになったと思う。私どもの区では市税（固定資産税を含む）を基礎に各戸に割り当てた。

学校の建築は佐伯土木が請け負った。製材所や材木店も組合で木材の納入を割り当て、原価で持ち込むようにしていた。私とこの会社は二階梁を全部請け負っていた。

主に二十五尺（七、五<sup>メートル</sup>）一尺五寸（四十五<sup>センチ</sup>）×三寸（九<sup>センチ</sup>）の合わせ梁、原木を集めるのに苦労した。延岡宮林署の重岡土場<sup>どば</sup>に佐伯合同トラック二台連れ、引き取りに行つたのを思い出す。一台がパンクしてチューブを取り出し、自転車のようにゴム糊で貼っていた。土台は檜の四寸五分角であった。

## （二）お地藏さんと宝泉さんと

我が家は、五代前の作平の時に中村から分家して蟹田に來たという。だから父が死んだ時、中村の宮崎一族や武藤さんが來ていたことを思い出す。また臼坪の高山藤作さん、高山松藏さん両家には代々大変お世話になっていた。先祖、加藤作平の妻ツマは非常に信仰心の厚い人であった。

慶長七年、佐伯鶴谷城築城に当たり、宇和島城築城に係した宝珠という山伏が、現場の責任者として築城に当たった。城完成後秘密を知るものとして、領内に止められ（一説には腕の筋を切り）幽閉された。彼は死ぬまで望郷の念にかられていた。その亡骸を松ヶ鼻に埋めた。

後にツマの夢枕に立つたと言われているが、ツマは伊

豫の見える丘、蟹田（現平野）の地に小さな庵を建てねんごろに申った。後、宝寿院又は筋神様と呼ばれ、靈験あらたかであつたのだから佐伯四国第二番札所としてお詣りの人が多かった。この靈地を祖父が弟岩蔵に譲る。妻ツネが開いていた茶店もそこそこにはやっていた。臼坪、中村、長島の農家は、田上がりや稲の収穫が終われば、よつぴいて鉦や太鼓を叩き歌舞を囃し、一日楽しんでいた。

年に数回ある庚申待の日には、近隣の人々は夜食や酒を持ち寄り、子供連れで夜明かししていた。お堂の正面には猿田彦の掛け軸も飾られていた。

茶店の脇においしい井戸水と蟹田講のお地藏さんがあつた。浦辺の人は目患いが多く、お供えのシキミの葉とお水を戴いていた。また香華が絶えなかつた。

作平夫婦のお墓と死に絶えた本家の墓石数基がお堂の脇にあつた。お盆正月前に掃除に行き、帰りに上り場あがばで小野富の焼酎屋のおばさんが開いていた軽食の店で、うどんを食べて帰っていたのも遠い昔の思い出である。

庵は個人所有が出来なかつたので養賢寺所有になつていた。加藤金次郎が岩本某に庵を貸し、某は坊主の真似事をしていた。金次郎は戦後庵の所有権返還の争いをした

が、裁判の末養賢寺に取られ札所は大日寺に移した。庵の左脇に、我が家の先祖の墓地があつたが先年長男隆司が、祖父が開いた新墓場に寄せた。

お地藏さんは、加藤佐吉、小野富吉、鳥居光男三名の方々で加藤佐吉さんの墓地前に移しお祀りをしている。裏に文久□年、蟹田講と刻まれている。



蟹田講とお地藏さん